



科学ジャーナリズムと公共知AI

山形 俊男

近年、地球温暖化に伴い、猛暑、豪雨、干ばつなどの極端な自然現象が世界各地で頻発している。気候の変化は季節進行や生態系にも影響を与え、私たちの日常生活や社会を脅かしている。一方で、情報は瞬時に拡散し、科学的に十分検証されていない見解や、過度に単純化された言説が人々の不安を煽る場面も急激に増えている。

あらゆる物事の背景には、様々な時空スケールの事象があり、複雑な相互作用が存在する。気候もその例外ではない。科学は、即断や断定を許さず、観測・理論・数値実験を積み重ねながら、仮説を検証し、知を深め続ける営みである。研究者には、流行や外部の圧力に流されず、自然と真摯に向き合い続ける姿勢が求められる。しかし、科学的知見がそのまま社会に伝わることは稀である。ここで重要な役割を担うのが科学ジャーナリストである。科学を分かりやすく伝えるだけでなく、どのような文脈で理解すべきか、不確実性をどう受け止めるべきかを示すことが、強く求められている。科学ジャーナリズムとは、科学者と市民社会の間に信頼の回路を築く重要な営みである。

いま、生成AIの急速な発展によって、人類の知のあり方は大きな転換点を迎えている。AIは単なる効率化の道具ではなく、どのような知を学び、どのような価値観のもとで運用されるかによって、社会に与える影響は大きく異なる。私は、科学的知見や歴史的経験を人類全体で共有し、未来世代に手渡していく仕組みとして「公共知AI」という構想に期待する。これは、科学者だけでなく、科学ジャーナリストの関与なしには

成立しない。

生成AIの進歩は、科学ジャーナリズムの現場において、仕事そのものが失われるのではないかという不安を生みつつあると聞く。しかし、何を問い、何を伝えるべきかを選び取り、事実の背後にある意味や価値判断の前提を掘り下げ、社会の文脈の中で語る営みは、決して自動化できない。AIが進化すればするほど、その専門性と責任はむしろ鮮明になる。事実の重み、議論の経緯、失敗や反省を含めて記録し、編集し、社会に開く役割は、まさに科学ジャーナリズムの核心だからである。話題性や刺激的な表現に流されず、長期的視点から惑星地球に生きる人類のあるべき姿を描き続けること、これこそが科学ジャーナリストに求められる先導的役割だろう。

不確実性に満ちた現代社会において、とりわけ若い世代の心は揺れている。しかし、揺れること自体は弱さではない。強風に抗って折れるのではなく、風を受けながら根を張る、そのようなしなやかさと逞しさを併せ持つ姿勢こそ、これからの時代に必要だと思う。人類は様々な困難の中で地球生命の輪の中に生きてきた。それを未来への希望として伝えられるかどうかは、私たちが知をどのように扱うかにかかっている。科学ジャーナリズムが果たす役割は、人々の揺れる心に寄り添いながら、社会の進むべき道を静かに照らすことであろう。しなやかに、そして逞しく——その精神が、次世代へと受け継がれていくことを願っている。その旗手として歩み続ける科学ジャーナリストに深い期待を寄せている。
(東京大学名誉教授)

CONTENTS

巻頭言	1
【ニュース】 J塾修了式/J塾を終えて	2
【特集】 科学ジャーナリスト世界会議	
WCSJ2025南アフリカ大会報告	3
【ニュース】 J賞一次選考通過作	8
【特集】 高校生作文コンクール受賞作品	8

例会報告(11月) 世界のAI政策(市川類さん)	11
例会報告(12月) 日本のレアアース(加藤泰浩さん)	12
例会報告(1月) ファクトチェック(瀬川至朗さん)	13
オピニオン/賛助会員	14
理事会から/賛助会員	15
事務局だより/新入会員/会員のBOOKS	16

科学ジャーナリストの「現在地」を学ぶ 第23期修了式を開催

第23期科学ジャーナリスト塾（J塾）の修了式が2月25日、日比谷図書文化館で行われた。20名がJ塾に参加し、最終作品を提出した11名が修了証書を手にした。作品を提出していないが、冷たい雨の中、会場に足を運んだ塾生2名は参加証書を受け取った。

修了式は、まず室山哲也会長から「塾が始まる前の自分と今の自分を重ね合わせて作文すると何がちがっていますか？」との問いかけから始まった。講師代表の亀松太郎さんは、現場・現物に触れる価値について語り、進歩していくメディア環境を取り入れ、塾での学びを組み合わせ、これからの情報発信に生かして欲しいと塾生に伝えた。

修了証書の授与では、塾生が一言発表。印象的だったのは、科学教育のコンテンツ制作にたずさわる塾生。「一貫して、思い込みと妄想をちゃんと自覚するというのがテーマだった」といい「伝えるということの難しさとか、ちょっとだけ楽しさの入り口を感じられて修了できました」と語った。広報担当の塾生の第一声は「『こんなにも伝わらないんだ』ということをすごく痛感しました」。伝えるためのテクニックを学ぶだけでなく、「伝えることと向き合う

ということとは、こういうことなんだとわかった」と、懇親会で話していた。

式の終わりに高橋真理子塾長は塾生や関係者の労をねぎらった後、この日に合わせて自身のウェブメディアに『科学ジャーナリズムとは何か』をテーマにした記事を公開したことに触れた。この記事を読んで、ジャーナリストは取材される側ではなく、「『読者のため』に働く人たち」という姿勢に共感した。

講義では、現在進行形で抱えている問題——激変するメディア環境とテクノロジーなどについて、講師や塾生との質疑応答によって立体的に考えられるようになった。未熟な自分には貴重な学びだった。

（会員／J塾23期生 長尾和也）



第23期科学ジャーナリスト塾の修了式に集まった塾生と講師・関係者たち（東京・日比谷図書文化館にて、都丸亜希子撮影）

科学ジャーナリスト塾での学びを通して

北欧のラトビア共和国に暮らして14年になる。日本から約8,200km離れたこの地から、科学ジャーナリスト塾（J塾）に参加できたのは、とてもありがたい機会だった。私は4年前に研究の道を離れた元生物系研究者で、現在は科学とは無関係な仕事をしている。科学記事を読むのが好きで、自分も伝える側になりたいと思ったのが、昨年春、科学ライティングを調べていくうちにJ塾にたどりついた。

正直に言えば、科学ジャーナリズムについて漠然としていた。開講式の塾長のミニ講座で、「科学ジャーナリズム、科学コミュニケーション、リスクコミュニケーション」の違いをはじめ理解した。講義から、科学ジャーナリズムに求められる視点や姿勢が見えてきた。強く心に残るのは、「伝える」と「伝わる」の違いだ。「伝わる」ことは相手の心を動かすこと。この重要性を忘れずにいたい。

テンポのよいライブ講義も、毎回楽しみだった。

私はすべての講義に出席し、必ず質問することを自らに課した。ひとつたりとも聞き逃さない気持ちで臨んだ時間は、濃密で、毎回あっという間に過ぎた。講師陣はもちろん、塾生たちの意見や質問も新鮮だった。科学ジャーナリズムとは、常に客観性を貫くものだと思い込んでいた。実際は、ファクトを土台にしながら、独自の主張を織り込むことができる。それを知ることができたのは、大きな収穫だ。

J塾での学びを書き込んだノートは、今後、科学に関わる仕事を志すうえで、バイブルになるに違いない。J塾での出会いに感謝している。

課題に取り組むなかで気づいたのは、「批判を恐れて無難にまとめてしまう」悪いクセ。課題で苦戦したのは、「自分の意見を述べるのが苦手」だからだ。もっと尖っていきたい。今回わかった弱点を克服すべく、さらに精進していきたい。

（会員／J塾23期生 溝端紀子）

特集 第13回科学ジャーナリスト世界会議

アフリカで初、JASTJから8人参加

第13回科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ2025)が2025年12月1日～5日の日程で南アフリカの行政首都であるプレトリアで開かれた。「科学ジャーナリズムと社会正義：理解とレジリエンスを築くジャーナリズム」というテーマのもと、73カ国から450人を超える科学ジャーナリストや専門家が集まり、日本科学技術ジャーナリスト会議(JASTJ)からは8人が参加した。

多様なセッション、充実の現地視察

会場は南アフリカ政府の研究開発機関・科学産業研究評議会(CSIR)の国際会議場(ICC)で、2日から4日にかけて58のセッションがあった。アフリカ大陸で初のWCSJであり、アフリカで活動するジャーナリスト向けのセッションも目立ったが、「誤情報への対応」「AIとの向き合い方」「気候変動問題の伝え方」などグローバルに共通する課題も多く取り上げられた。

12月1日と5日を中心に実施された現地視察(フィールドトリップ)は、人類化石の発掘研究現場や電波望遠鏡、動物保護区、大学の研究室訪問など21のコースがあり、充実していた。

視察参加を申し込んでもなかなか返事が来ないといったトラブルはいくつもあったものの、最終的にはJASTJメンバーはそれぞれ現地視察を堪能した(本特集の記事参照)。



JASTJから参加した8人。前列左から、越智小枝、高橋真理子、小出重幸、三輪佳子、後列左から井内千穂、清水健、照山恵美子、小島あゆみ

次々回は北京、報道の自由に懸念も

第14回世界会議は2027年にイギリス・ロンドンで開催と決定済みだ。2029年の第15回をどこで開くか。これを決めるのが、南アフリカ大会の重要なミッションだった。名乗りを上げたのはオーストラリア・アデレードと中国・北京で、2日に開かれた招致演説会では活発な質疑応答があった。

オーストラリアは2007年にメルボルンで第5回を開いた。だが、ロンドンも2009年の第6回に続く2回目だ。同じ国での開催に支障はない。課題となる資金獲得を心配する質問が相次いだ。

一方、科学技術大国となりつつある中国は、取材対象として魅力的だが、報道の自由がない。国際NGO「国境なき記者団」が毎年発表する「世界報道自由度指数(World Press Freedom Index)」2025年版ではランク最下位のエリトリア、次の北朝鮮に続いて、中国は下から3番目だ。このデータを紹介して「参加者は自由にレポートできるのか」と質す参加者もいた。

中国代表は「中国は、科学者たちの成果を広く世界に報道してほしいと願っている。ウィンウィンの関係になるはずだ」などと説明、「中国の報道の自由度が上がるように皆さんも協力してほしい」と訴える場面もあった。

その後の審査は連盟理事会に任され、4日の閉会式でベン・デイトン会長が「北京」と発表した。

(理事 高橋真理子)



(写真上) WCSJ2025の会場となったCSIR ICCの入口(写真撮影：小出重幸)



(写真下) 招致演説会で熱弁を振るうオーストラリア代表(写真提供：WCSJ2025)

世界連盟の年次総会、新体制の成果を強調

世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）の年次総会が12月3日、世界会議開催中の南アフリカ科学産業研究評議会（CSIR）で開かれ、34団体の代表が参加した。会場には24団体の代表者が入り、10団体の代表はオンラインで参加する「ハイブリッド会議」だった。

WFSJには日本からJASTJと日本医学ジャーナリスト協会（MEJAJ）の2団体が加盟している。JASTJを代表して小出、MEJAJを代表して小島あゆみさん（JASTJ会員でもある）が総会に出席した。

ベン・デイトン会長は、まず2024年からのWFSJの動きを説明した。当時の会計担当理事が、WFSJの財務情報へアクセスすることを何度も拒否されるなど、会長、副会長の運営に不透明さがあったことから、同年6月に臨時理事会を開催。会長と副会長を解任し、新体制を作って11月にハンガリー・ブダペストで年次総会を開き、ここで一連の改革が多くの会員の支持を受け、新体制が承認された。

2025年には「科学ジャーナリストのための取材指針」を作成し、WFSJ公式サイト内の「科学報

道の倫理」ページを充実させたほか、2年ごとに世界会議を開く方式を回復できたと、デイトン会長は成果を強調した。

一方、会計担当のジャンマルク・フルーリー理事は、2024年11月の年次総会で「用途の不明な支出

があり、正常な決算報告ができない」としていた連盟の財務状況について、「事務経費に約4万4千ドルが過大に計上されていたことがわかり、減額修正して不明点は解消された」と説明した。

新体制の理事も選

任された。フルーリー理事と、チャトラ・カーキ・副会長（ネパール）が退任し、新たな会計担当はカナダのロンダ・ムーア理事に引き継がれた。そのほかの役員は以下の通り。会長：ベン・デイトン（イギリス）、副会長：ジョセフ・ムベング・ブーム（カメルーン）、レスリー・エヴァンス・オグデン（カナダ）、書記：アレダ・ルエダ（メキシコ）、理事：デビー・ポンチナー（コスタリカ）、スブラ・プリヤダルシニ（インド）、アガサ・ンゴソ（ケニア）。

（理事 小出重幸）



年次総会終了後の参加者記念写真。ベン・デイトン会長（前列中央）と、その向かって左隣にジャンマルク・フルーリー氏（グレーの上着）

アジア太平洋地域のネットワークが初会合

アジア地域の科学ジャーナリストのネットワークを再編成するプロジェクトが動き出し、南アフリカ世界会議の会場で第1回のミーティングが開催された。

JASTJが世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）と協力して2013年から3年間進めた、アジア地域の科学ジャーナリスト養成プログラム（SjCOOP Asia）の成果で、アジア地域の科学ジャーナリスト組織のネットワークが作られたが、コロナ・パンデミックの混乱などで連絡網が消滅していた。

2024年11月のWFSJブダペスト年次総会に集まった各国代表たちでネットワーク参加者名簿が作られ、2025年11月の事前オンライン会議をへて、12月

3日、南アフリカ世界会議の会場で、テーブルを囲んでの初めてのミーティング開催にこぎつけた。

会合にはオーストラリア、韓国代表に加えて、中国科学技術報道協会（CSSTJ）の代表も参加。インド、ネパール、インドネシア、フィリピン、シンガポール、日本の計9か国の組織が、オンライン会議などを活用して、情報交換、プロジェクト協力などを進めるという合意が確認された。

顔を合わせてのミーティングを定期的に関くには財政的な困難もあるが、インド科学ジャーナリスト協会（SIAI）が毎年11月に開催する年次大会の会場などで、次回ミーティングの機会を検討することになった。

（理事 小出重幸）

冷笑せずに理想を語ることの大切さ

科学ジャーナリスト世界会議南アフリカ大会(WCSJ2025)のテーマは「科学ジャーナリズムと社会的正義」。南アフリカの科学技術イノベーション大臣ブレード・ンジマンデ氏は、開会挨拶において、テーマを「公共の福祉に対して示唆的」と評価した。また、ガザでの民間人殺害やジャーナリスト殺害におけるAI技術の活用を例に挙げ、人権侵害に抗う科学ジャーナリズムの取り組みの緊急性を訴えた。

南アフリカでは「社会のあらゆる層が科学にアクセスして参加」という方針のもと、科学ジャーナリズムの振興に注力しているが、“翼賛”は期待していない。あくまで、政府に科学に基づく意思決定をさせ、マイノリティや社会的弱者の尊厳を守り差別や偏見と闘うよう促すことを期待する。しかし「言うは易し」。同国は格差や腐敗の深刻さで知られる。言葉通りに受け止めても大丈夫なのだろうか。

会期終了後、趣味の国際組織の仲間と会食し、ゲームを楽しんだ。集まった人々は実業家や教育者や大学生で、全員が白人。白人比率が約7%の南アフリカにおいて、非常に恵まれた階層に属する人々だ。開口一番、教育者の女性が「世界の科学ジャーナリストが南アフリカに集まって、何をしてるの？」と鋭く質問した。表情と口調には不信感が現れていた。

そこで私は、気候変動や公衆衛生の課題、最も貧しく弱い人々への最も深刻な影響、すべての人を尊重しながら救済につなぐ具体的方法など、WCSJ2025で議論されたことを伝えた。彼女は笑顔



開会式で挨拶したンジマンデ科学技術イノベーション大臣
(写真提供：WCSJ2025)

を浮かべて「安心した」と言った。目の前の深刻な社会課題、取り残される人々、将来の機会まで奪われる子どもたちに、世界の科学ジャーナリストたちが関心を向けていることを知ったからだ。私も、恵まれた階層にある彼女が、自国の格差と貧困に深い関心を向けていることに安心した。

南アフリカは数多くの社会課題を抱えており、解決は容易ではない。ンジマンデ氏も、自分が生きている間に社会課題が劇的に改善されることは期待していないのかもしれない。でも、理想を見失わずに毎日の取り組みを続けることはできる。この国の科学ジャーナリズムには、科学に基づいて、何がどのように社会的正義でありうるのかを示す役割が期待されている。さて、日本の私たちは？ まだ社会に何かを期待されているだろうか？ 重い自問が残った。(理事 三輪佳子)

開会式に響いたアカペラの主は職域合唱団

12月2日の朝、科学産業研究評議会(CSIR)国際会議場(ICC)のダイヤモンド講堂で、科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ)2025の開会式が始まった。合唱団が歌う南アフリカ国歌を参加者が起立して聴く。主催者および来賓の挨拶があり、しめくくりには科学技術イノベーション省(DSI)のブレード・ンジマンデ大臣がスピーチして開会を宣言した。そのあと合唱団が歌声と共に再度登壇してきた。



DSIの職員と清掃員がメン

WCSJ2025開会式で心を揺さぶる歌声を披露した合唱団

バーの合唱団だ。この日のためにランチタイムや始業前の早朝に集まって練習を重ねたという。「主よ、お側に参ります」他2曲が披露された。アカペラ(楽器の伴奏なしで声だけで歌うこと)の歌声は豊かでハーモニーが美しく響き、ステップや手の振りも見事に揃っていた。職場に歌声サークルがあるなんて、と一気に親近感が湧き、アフリカの人々の天賦の音楽的才能に触れることができたひとときだった。

(会員 照山恵美子)

フォークダンス方式で研究者と次々語らう

科学者たちとの「ライトニングラウンド（即問即答）」を謳った「人・地球・可能性：ウェルビーイングのためのシステム科学とジャーナリズム」は、カジュアルに多くの研究者と話せるかもしれないという、私の期待通りのセッションだった。

主催の国際応用システム分析研究所（IIASA）は、東西冷戦下の1972年に政府の関わりを排して主要国が設立した研究所だ。現在はシステム分析を用いた研究を通じて地球規模の課題の解決を目指している。

このセッションの狙いは「短く集中した対話を通じて、科学ジャーナリストが新たな取材の糸口を発見し、システム思考への理解を深め、信頼できる情報源のグローバルネットワークを構築する」というもの。ルールは簡単で、フォークダンスのように会場の壁際に立つ研究者の前を科学ジャーナリストが1人ずつ順番に回っていく。1人の研究者と話せるのは5～10分ほどだが、それでもアフリカが抱える課題とその複層性、研究の学際的なアプローチを知ることができ、次第にIIASAのシステム思考についても理解が深まっていく。

印象に残ったのは、ケニアのダニエル・ムワンガさんの話。彼はアフリカ人口保健研究センターで子どものメンタルヘルスに取り組むデータサイエンティストである。ケニアでは、うつ病などの精神疾患や神経疾患をもつ思春期の子どもたちは、伝統医療や宗教指導者、教師に頼る傾向があるという。そこで、教師が子どもたちの精神保健上の問題を発見した場合に医師と相談できるようにするシステムを構築しているそうだ。

このほか、大気汚染、廃プラスチックのエネルギー貯蔵材料への変換、食糧安全保障を目指した作物のゲノム編集などのテーマに取り組む研究者たちとも話した。

まず顔見知りになり、互いの関心を述べ合うことで、将来的に科学ジャーナリストにとっては取材先、研究者にとっては広報やアウトリーチの依頼先となる道を開く“スピードネットワーキング”。人見知りでも、答えられない質問をされても、話を続けざるを得ないので、双方の胆力を鍛えるメリットがあると感じた。日本の研究機関でも、ぜひ試してもらいたい。（会員 小島あゆみ）

未来の食・昆虫食を食べてみた！

「食用虫：未来の食の再考」と題したプレトリア大学主催の現地視察に参加した。同大学は食品科学が盛んであり、専用校舎には専属シェフが調理を研究する厨房まである。そこでは虫の粉を使った色鮮やかな料理も振る舞われた。

材料はコオロギの一種の幼虫と、モパニワームという3cm程の乾燥イモムシ。干しエビのような食感と香りがする。虫の粉は他の調味料と熱変性の温度も違うため、最適な調理法を模索するだけで

も途方もない試行錯誤が必要だという。

昆虫はたんぱく質や微量元素などの栄養価が高く、またSDGsの観点からも優れた食品だ。1kgのたんぱく質を合成するのに必要な植物の量は、牛だと約8kg、鶏は2kg。虫なら1.8kg程度の飼料で済む。昆虫はライフサイクルが短く、飼育スペースが小さいことなどから量産性にも優れる。

アフリカでは、貧困層の女性たちが授乳より働きに出ることを優先することも多く、乳幼児のたんぱく質摂取不足は深刻な問題だ。食事に虫の粉末を混ぜることで栄養改善につながり得る。また失業率が約30%の南アフリカでは、比較的単純作業の昆虫の飼育が雇用を生み得るのも魅力だ。

しかし、昆虫食は流通していない。なぜか。文化的な忌避に加え、食品衛生管理基準の欠如が問題だという。たとえば重金属などの環境汚染の濃縮の程度は昆虫の種類ごとに異なる。突然変異による毒性獲得がないかどうかの検証も必要だ。安全性基準を上げればコスト増にもつながる。このバランスが難しいようだ。（会員 越智小枝）



厨房でコオロギの粉入りマカロンを紹介するシェフ（左）と研究者

南アフリカの先端研究に触れた電波天文台

現地視察ではハーテビーステック電波天文台(HartRAO)の見学に参加した。南半球に位置する南アフリカの地理的特性を活かした研究現場を実見し、さまざまな可能性を切り拓こうとする取り組みを学ぶことができた。

HartRAOの直径26メートルのパラボラアンテナは1961年に米航空宇宙局(NASA)によって建設された。1975年にNASAから南アフリカ科学産業研究評議会へ移管され、現在は南アフリカ電波天文台(SARAO)が運営管理している。隣接する管制所の壁一面に、アポロ計画など数々の宇宙探査計画への貢献を顕彰する銘板が掲げられていた。

南アフリカはカール地方に電波望遠鏡群MeerKATを新設しており、オーストラリアとともに次世代電波望遠鏡計画SKAの中核を担っている。HartRAOにはMeerKATの実験開発モデルとして建造された直径15メートルの電波望遠鏡もある。さらに、直径13.2メートルのVLBI(超長基線電波干渉法)グローバル観測システム(VGOS)電波望遠鏡が最近稼働し始めており、この中を登って



直径26メートルの電波望遠鏡の前で説明を聞く参加者たち(左端が筆者)

最新鋭の観測機器を目の当たりにした。

SKA計画への参加をきっかけに、南アフリカでは天文学を研究する大学が7校まで増えた。電波天文学を支えるアフリカの若手研究者や技術者の育成につながっている。

また、SARAOでは地域社会への貢献にも注力している。国際的な研究施設の建設は新たな雇用を生み、天文学を観光と結びつけるアストロ・ツーリズムの試みも始まっている。(会員 清水健)

発見相次ぐ「人類のゆりかご」を訪ねて

世界遺産である南アフリカ人類化石遺跡群を訪ねる現地視察に参加し、人類の進化の道筋を書き換えるかもしれない近年の発掘現場を垣間見た。

プレトリアの国際会議場からマイクロバスで西へ。小1時間ほどでマラパに着く。木立にふとキリンが見え、草原の彼方にインパラが走る野生動物の保護区内だ。付近の石灰石採掘場跡で2008年、古人類学者リー・バーガー博士と9歳の息子が猿人の化石を発見した。200万年前のものと推定され、バーガー博士はアウストラロピテクス・セディバ(セディバ猿人)と名付けた。

さらにバスで30分ほどのライジングスター洞窟群では、2013年以来、2000個に上る骨や歯が採集され、バーガー博士らのチームは、「ホモ・ナレディ」と名付けた。約20万年～30万年前のものという推

定結果もあり、現生人類と共存していた新たなヒトであるのか、論争が続いている。

洞窟での発掘作業を担った女性たちの一人、南アフリカ出身のケネイロエ・モロピアニ博士の案内で洞窟の一つに入った。暗がりの奥に狭い地下トンネルの入口が見える。ホモ・ナレディは洞窟に死者を埋葬したのではないか。暗闇を照らす火を使ったのでは? そんな仮説も唱えられているが、まだ研究途上だ。「最近地元で古人類学を専攻する学生が増えている」と博士は朗らかに言った。

南アフリカの「人類のゆりかご」での相次ぐ発見によって、従来の仮説はどう更新されていくのか。スキャン画像や3Dモデルなど最新の技術を駆使した化石の分析が今も進行中だ。(理事 井内千穂)



ライジングスター洞窟群で洞窟の中に入った一行。モロピアニ博士(2列目右端)の左隣が筆者(写真提供 エドアルド・キンタナ)

科学ジャーナリスト賞2026一次選考通過作品決まる

科学ジャーナリスト賞（J賞）委員会は2月20日に「科学ジャーナリスト賞2026」一次選考会を対面とオンライン併用のハイブリッド形式で開き、最終選考に残す10作品を選んだ。

2025年7月から募集を開始し25年末までに、JASTJの内外から51作品の推薦があった。内訳は書籍27作品、映像11作品、新聞6作品、展示4作品、WEB 3作品だった。総数では昨年度（61作品）を下回ったが、多彩なジャンルから候補があがった。推薦していたり評価に協力をいただいたりしたJASTJ会員、および会員外のみなさまに感謝を申し上げたい。

一次選考では、いくつかの作品で委員の評価が分かれ激しい議論になった。そうした議論を呼ぶ作品はそれだけ作品が内包する問題意識が深いものと考え、あえて最終選考に残した。またWEBの「Neu World」は、先端的な研究開発が実用化された未来の姿を小説や漫画で提示することを通じ、研究開発成果がもたらす社会的インパクトを多くの人に知ってもらうことを狙った試み。フィクションは原則的に賞の対象としてこなかったが、科学コミュニケーションの新しい形を模索する作品として最終選考に残した。最終選考は4月11日の予定。

（事務局長 滝順一）

科学ジャーナリスト賞2026一次選考通過作品

種類	作品名	著者・制作者代表	出版社など
書籍	仁科芳雄 「原爆を作ろうとした物理学者」がみたもの	上山明博	青土社
書籍	汚された水道水 「発がん物質」PFASと米軍基地を追う	松島京太	東京新聞
書籍	サボテンは世界を作り出す 「緑の哲学者：の知られざる生態	堀部貴紀	朝日新聞出版
書籍	「科学的に正しい」の罫	千葉聡	SB 新書
新聞	先住民族の遺骨返還をめぐるスクープと一連の報道	三股智子	毎日新聞
映像	NHK スペシャル 「ディープオーシャン 幻のシーラカンス王国」	岩崎弘倫、薦田昌純	NHK
映像	いまからサイエンス	林祐輔	BS テレ東
映像	映画「ヒポクラテスの盲点」	大西隼	「ヒポクラテスの盲点」製作委員会
映像	NHK スペシャル大型シリーズ「ヒューマンエイジ 人間の時代」	佐藤匠	NHK
WEB	Neu World	宮田龍	株式会社アラヤ

●一次選考結果はJASTJホームページで公表。代表者名等は一次選考段階での記載であり受賞決定後のものとは異なる場合がある。

科学ジャーナリスト賞 20周年記念 高校生作文コンクール受賞者作品

※前号に続き、今号では1作品を掲載し、残り1作品は次号で掲載予定。

課題図書「情報パンデミック あなたを惑わすものの正体」を読んで

情報洪水の渦の中で 辻本 伸子

陰謀論は古代ローマでカエサルが暗殺された時代から、あるいはそれより前の、ひょっとしたら歴史として後世に伝わることのなかった時代から、人間が社会生活を送る限り、人間と切っても切れない関係性にある。しかしながら、インターネットやSNSの登場により、現代人は「情報

洪水」の渦の中に飲まれ、陰謀論の質や量、そしてそれらの持つエネルギーはそれ以前のもの大きく変化した。

本書のタイトルである「情報パンデミック」は現代社会の情報の在り方を適切に表現している。人間社会が情報に溢れ返った結果、流れてくる情

報の真偽を判断をすることは難しくなり、さらにインターネットという基盤があることで、科学的根拠のない情報も拡散が容易になってしまった。つまり情報過多という環境的要因と、偏った情報の拡散という構造的要因によって、陰謀論は現代でも広がりやすくなっていると言えるだろう。

また、本書では、陰謀論は科学的に十分な根拠に基づいていないということが度々言及され、陰謀論者が科学的言説をしばしば拒否するか、曲解してしまうといった傾向が読み取れる。

しかし、そもそも「科学的である」ということは、一体どういうことなのだろうか。

科学とは、条件さえ満たせば誰でも再現が可能な一定の基準であり、現代社会では科学に基づき物事が定義され、我々の生活をあらゆる側面から支えている。中立的で客観性が担保されている基準であり、人間が世界を説明するために生み出した素晴らしい道具であると言えるだろう。

しかし、時代が進み技術が発展していくと、科学はそれぞれの分野において深まっていき、該当分野の最先端を理解するには専門的な知識がなければならぬ、といったことも起こるようになった。例えば私は今、この文章をパソコンで入力しているが、私はこれらの機器の仕組みを理解し説明することはできない。また、私の周りの家族や友人も仕組みを説明できる人の方が少ないだろう。他にも、自動車や電気、インターネットなど、私達の周りには原理を理解せずとも我々を助けてくれる道具で溢れている。また、本書で度々取り上げられるコロナワクチンに関しても、その仕組みを説明できる人は果たしてどれくらいいるのであろうか。

たとえ科学に造詣の深くない我々でも、有難いことにネットや本などで情報にはアクセスできるため、物理的な断絶という点では、むしろ昔よりも軽減されたと言って良いだろう。しかし、専門知識や基礎的な知識がなければ、折角情報を得ることができたとしても、その内容を正しく理解することは難しい。

我々人間は現代社会において、論理や仕組みを理解しないまま科学に基づく道具を使用することを実現させたのだ。それは、深い専門性を持つ人間とそうでない人間との断絶を生み出し

た。そして「科学的理解の断絶」こそが「情報洪水」とともに、現代において陰謀論の問題を根深くするもう一つの要因なのではなっているのではないかと私は考える。人間は不確かなものに対して、単純化された説明や物語を求める傾向がある。陰謀論は説明を求める人間のニーズを満たすように機能する上、そもそもたとえ誤った言説に対して正しい説明をされたとしても、その説明が理解できなければ、それは説明としての役割を果たしているとは言えない。

しかしながら、今後も科学の進化は進んでいくだろう。生成AIの登場などで、進化のスピードはむしろ大幅に加速するかもしれない。既にその科学的論理を理解している人間や、理解を目指す人間にとってはあまり大きな問題ではないかもしれないが、しかし恩恵を受ける我々にとっては、科学の進化のペースが早まることは断絶をさらに深める可能性もある。

では、我々はこの「科学理解の断絶」という問題にどのように向き合っていくべきなのだろうか。

一つの案として、私は科学に対する関心を絶やさないように科学に造詣の深い者とそうでない者の双方が努力をしていくことを考えた。一見するとそんなの当たり前だ、できたら苦労しない、と感じる意見だ。実際私もそう感じる。しかし、噛み砕いてみると、部分的にはあるがこれはもう既に行われ始めていることだったりするのだ。

例えば小中高生に対する研究者の出張授業や、博物館への訪問などは、科学に関心を持つきっかけとして有効であると考えられし実際もう取り組まれているだろう。研究者と話す機会も我々が思うよりも探せばたくさんある。実際私も高校時代、分野問わず様々な研究者の話を聞くことができた。

より科学に触れる機会を増やすということに関して難易度が高く深刻なのは、大人世代なのではないだろうか。実際陰謀論に傾倒してしまうのはいわゆる中年といった年代か、それより上の人が多く、また、この年代の人は現状として自発的に関心を持たなければ、科学に触れることは中々ないだろう。

しかし、大人に関してならば、私は本書で出てくる大人を見ていると、私には彼らは「科学知

識がない」という自覚が薄いのではないか、という風に見えた。自分なりに「調べた」結果として陰謀論に傾倒している人が多く、ならば科学に触れる機会を増やしたところで「自分の知る知識が正しい」となってしまう場合だってあるだろう。

私は「分からないことを恥じない」という空気が大人にも子どもにも必要だと考える。知らないこと、分からないことがあるのは人間として全く自然なことである。人間には様々な心理バイアスがあるため、一度抱いた自分の考えを改めることは中々に難しい。それでも、自分は無知であるという自覚を持ち、分からないことを無理に単純化し理解しようとして結果的に曲解してしまうより、素直に有識者の意見を求めるべきだと思うのだ。そして、知識のある者、有識者は可能な限りわかりやすく我々に科学を伝える努力が求められるのではないかと私は考える。

知識の乏しい我々が、我々の範囲で理解できる理論などごく僅かしかない。むしろこの複雑な世界の中、我々が理解できるように単純にストーリー化された情報こそ、疑うべきでないだろうか。

ところで、本書を読み私はもう一つ感じたことがある。それは陰謀論者は孤立しやすい、あるいは孤独を感じていることが多いということである。調べてみるとそれらは実際海外の研究等でも示されていることであり、陰謀論者と非陰謀論者はお互いに避けあうことなども分かってきている。

それらを踏まえ、私は社会的に孤立しない、心理的に孤独にさせない社会を実現させることも「科学理解の断絶」と同様に必要なのではないかと考えた。

先程述べた「科学理解の断絶」の解決法として私は学ぶこと、啓蒙することを提案した。しかし果たしてそれで十分と言えるのだろうか。私は個人的に知識は思考を通じて使ってこそ意味をなすものであり、ただ頭の中にあるのみではその価値を十分に発揮することはできないと考えている。

そこで私は知識を使い知恵として昇華すること、そして孤独や孤立を防ぐためにも「対話」というものを提案したい。

対話の価値やその前提などに言及するとテー

マから逸れてしまう為ここでは割愛するが、現代では常に社会から正解を求められるからか、自己にも他者にも正解を求めてしまいがちである。そして他人と意見が異なることを必要以上に恐れるあまり、ただそこに存在するというものの価値を認めるという本来対話の前提となっている条件が、我々には意外と忘れ去られてしまっているのではないだろうか。

老若男女関係なく、様々な価値観を持つ人が一堂に会してそれぞれの「考える人間」としての価値を等しく認め合う。そんな空間は、現代社会にこそ必要とされているのではないかと考えた。

知らないこと、分からないことを恐れずに科学理解の断絶を解消しようと努力すること。同時に「ただ存在すること」という価値を認めた上で対話を行い、それを通じて孤独や孤立を減らしていくこと。この2つが、私が本書を読んだ上で情報洪水の渦中にある現代社会にとって必要になってくることなのではないかと考えた。

私は現在、フェイクニュースや陰謀論について自主的に探究を行っていて、将来的にもそれらを継続していきたいと考えているが、自主的に調べている分野ですらもう分からないことばかりである上、他の分野に行けば知らないこと、分からないことはそれこそ星の数ほどある。

だからこそ、私は「知らない私」を素直に受け入れ、知識が少ないこと、知らないことを恥じないようにしたいし、知らなかった自分を素直に認めそこから成長していける人間になりたい。

また、将来科学に関わる仕事に就くことができたとしたら、自分が知っていることを対話を通じてできるだけ分かりやすく人に伝え、同時に他人の意見に耳を傾けることを忘れないようにしたいと考える。

最後に、かの有名な孔子の言葉を紹介したい。「子曰、過而不改、是謂過矣。」

間違えることそれ自体が悪いのではなく、過ちを自覚したのにも関わらずそれを改めなかったとき、人は初めて過ちを犯すのだ、といった意味の言葉である。

この言葉を胸に刻み、科学という人類の財産を未来へ繋ぐことのできる人材になれば、幸いである。

規制から推進へ——変わる世界のAI政策 米中覇権競争、揺れる欧州、日本は

AIが急速な発展を遂げる一方で、開発促進と安全確保の両立を目指すための制度（ガバナンス）が、世界中で議論されている。昨年11月17日に東京・内幸町の日本プレスセンター会議室で、月例会「世界のAI政策をめぐる動向」がハイブリッド形式で開催された。講師はAIガバナンス研究が専門の市川類（たぐい）・一橋大学イノベーション研究センター特任教授。各国のAI政策の状況を中心に話を聞いた。

社会規範を背景にしたAIガバナンス

大量データと深層学習を特徴とする第3次AIブーム以降、AIガバナンス政策の検討は、特に2019年頃から活発化している。政策の方向性は、国によってさまざま。AIへの法的拘束力を強めていたのが欧州。対極にしているのが日本だ。

背景には、宗教や大衆文化などの社会規範の違いがある。「鉄腕アトム、ドラえもん、Aibo（アイボ）など、日本人がロボットに抱く愛着は類を見ない」と市川さんは指摘する。

AIへの不信感が強い欧州では2021年、世界初となる包括的なAI規制法案が提案された。AIガバナンスの方向には、人間を超える人工知能への「将来的不安感」も大きく影響している。生成AIが登場した2023年は、世界各国で規制の強化に傾いた。

トランプ政権のAI政策

しかし、2025年以降、欧米を中心にAIイノベーション促進に向けた政策転換が図られる。背景にあるのが技術・産業構造の変化だ。大手企業の寡占状態にあった米国AI市場に、スタートアップ企業が台頭。大手企業にとっても、対中国との競争力確保の必要性から規制緩和への要望が高まった。

トランプ政権発足後に米国で発表されたのが「AI行動計画」だ。大手企業を巻き込んだAI政策の重点化を図り、対中国との競争を強調。同盟国で技術繁栄ディール（TPD）を締結した。バイデン政権時代のガバナンスの見直しも色濃い。人種・性別の多様性や公平性に配慮した「Woke AI」を防止するガイドラインの発表は、大きな物議を巻き



日本は中立の立場にあると現状を語った市川さん（撮影 井内千穂）

起こしている。

トレンドの変化によってジレンマに陥ったのが欧州AI規制法案だ。AI分野への大規模投資を発表したフランスの批判をはじめ、法案の規制緩和・簡素化が求められると、ガイドライン等の整備に遅れが生じた。最終版では、安全・セキュリティ等に関する記述が大幅に削除された。

国際協調的な中国、中立的な日本

欧州とは対照的に中国は2023年8月に、生成AI規制に関する法案が提案後わずか4か月という速さで施行される。規制の趣旨はコンテンツ（表現）規制が中心で、社会主義の価値観を堅持する姿勢を特徴とする。

AI分野で米国と覇権競争を続ける中国では、米国による半導体規制を受けながらも、2025年1月に「DeepSeek」が発表された。2024年3月に全人代で発表された「AIプラス計画」は、AIの社会普及に重点を置き、途上国支援に注力するなど国際協調的な戦略を図る。

米中対立、さらにはインドなどのグローバルサウスの台頭の中で、グローバルな視点で見れば日本は中立の立場にある。今後、日本はどのような戦略を取るべきなのか。質疑応答で市川さんは「日本が強みを持つ製造業などの産業と組み合わせた、応用型のAIサービスにいかにか投資していくかが重要」と回答。一方で、取るべき戦略や、投資すべき対象が明確に見極められていないというのも現状であると指摘した。（J塾23期生 石川拓音）

南鳥島「レアアース泥」が拓く日本の自立 激動の資源問題、発見の加藤泰浩教授が訴え

いま資源をめぐる世界が激動している。2025年12月の月例会は16日、「日本はレアアース大国になれるのか」と題して、資源地質学の第一人者で東京大学大学院工学系研究科長・工学部長の加藤泰浩教授を講師に迎えて開かれた。加藤教授は日本の安全保障を揺るがす資源問題の現状と、ゲームチェンジャーとなり得るといふ海底資源「レアアース泥」の可能性について熱く語った。

「ハイテク産業の生命線」は中国依存のまま

そもそもレアアースとは、レアメタルの中でも強力な磁性や光学的に優れた特性を持つ17の元素の集合を指す。「ハイテク産業の生命線」と加藤教授が称するように、レアアースは原料として輸入された額の100倍規模のレアアース製品を生み出すため、現代社会、特に再生可能エネルギーへの転換や、先端医療・航空機器産業などに欠かせない存在だ。

しかし、これまで地上で採掘されてきたレアアース資源の供給構造には、大きな歪みがある。2010年の尖閣諸島沖での漁船衝突事件をきっかけに中国が報復として輸出を削減した「レアアースショック」以来、日本を含む各国は調達先の多角化やサプライチェーンの強靱化を模索してきた。ただ教授によると、世界のレアアースの精錬事業の9割は依然として中国が占めており、最強の外交手段として利用している構造は、現在も変わっていないという。



講演する加藤泰浩教授（撮影 都丸亜希子）

「夢の泥」が持つ圧倒的な優位性

2011年、突破口として話題になったのが加藤教授たち日本の研究チームだった。太平洋の海底で見つけたのは、重レアアースを高濃度で含む「泥」。その泥が、日本の排他的経済水域（EEZ）である南鳥島を含む海域で、国内のレアアース需要の数百年分を賄える膨大な量で眠っている。この資源が、中国の陸上鉱山に比べて圧倒的に優位だという。

まず、その膨大な埋蔵量だ。南鳥島周辺には、日本のレアアース需要を数百年単位で賄える規模の泥が堆積している。次に、重レアアースの含有比率が陸上レアアース資源に比べて高いこと。さらに放射性物質（ウラン・トリウム）をほぼ含まない点だ。

中国のレアアース鉱山では、含まれる放射性物質の拡散による環境破壊や健康被害が課題となっているが、海底のレアアース泥はその懸念がない。有害物質の処理が不要で、海洋生態系への影響も最小限に抑えられる。教授は、環境破壊や人権侵害の温床となりやすい陸上資源に対し、このクリーンな「夢の泥」こそが未来社会の基盤になると力説する。

サプライチェーン構築で「ものづくり大国」復活へ

加藤教授は「南鳥島周辺の開発には一刻の猶予もない」と警鐘を鳴らす。中国がすでにEEZの近くで海洋資源の開発を加速させているからだ。教授が提案する対抗策は明確。まず、レアアース資源開発に意欲的な米国との共同開発と、石油開発などで高度な深海揚泥技術を持つ欧米諸国との連携で、実証実験をいち早く進めることである。

何より日本にとって重要なのは、「採掘」だけに留まらないことだという。公害を克服した経験を持つ日本の環境負荷の低い精錬プラントを活用し、レアアースを用いた高付加価値製品の開発までを日本国内で完結させる。このように採掘からモノづくりまでを繋ぐサプライチェーンを構築できれば、日本が真の「ものづくり大国」として豊かになる道が拓けると教授はビジョンを語った。

レアアースを巡る国際政治がさらに激しさを増しているだけに、「夢の泥」への関心はますます高まりそうだ。
(J塾23期生 川口明紗陽)

ファクトチェックは偽・誤情報対策として有効か

2026年1月の例会は、JASTJ理事で東京大学大学院情報学環特任教授、ファクトチェック・イニシアティブ理事長でもある瀬川至朗が登壇した。瀬川さんは、偏らない報道を行うための基本的な考え方やファクトチェックの重要性について話した。参加者からは活発な質疑や意見が、瀬川さんからは丁寧な応答が閉会時間まで続いた。

報道におけるファクトチェック

瀬川さんはまず、近年のファクトチェックを記事公開前の校閲・校正による自社コンテンツの正確性確保とは区別されるものとして位置づけた。具体的には、政治家などによる公共的な発言やSNS上の情報を対象に根拠に基づいて真偽を検証し、その結果を根拠とともに公表する実践だと説明した。

近年は即時性を重んじるインターネットやSNSが普及して真偽が確かめられないまま情報が拡散し、マスメディアのニュースより先に流れることにより、社会の事実認識が分かれる懸念が強まっている。こうした政治・社会の課題に対応するため、世界では2000年代前半、日本では2010年代後半から、メディアによるファクトチェックの取り組みが本格化した。2025年の参院選では、選挙前を含めて200本を超えるファクトチェック記事が公開された。

それではファクトチェックは偽・誤情報に対して訂正効果を有するのだろうか。講演では、2018年の沖縄県知事選を対象に、地元メディア等が公開したファクトチェック記事の影響を分析する研究(永井・

瀬川)が紹介された。この記事の公開前後で、誤りや疑念を含む情報のツイッター上の共有が変化したことから、「数量的にはファクトチェックに一定の訂正効果があったことが示唆される」と瀬川さん。

「バックファイア」をめぐる研究動向

「ファクトチェックは偽・誤情報に対して無力ではないか」「かえって逆効果(バックファイア)を招くのではないか」といった否定的な評価が語られることも少なくない。瀬川さんは、2010年に発表された「訂正は逆効果になり得る」という米国の論文が、「訂正は逆効果を招く」と一般化されて広まったと指摘した。その後の複数の研究により、バックファイアは特定の状況でのみ起こる例外的な現象で、通常はほとんど見られないと考えられるようになった。近年実施された4カ国を対象とした大規模な実験研究では、ファクトチェックによる訂正情報は政治的イデオロギーに関係なく、有意な効果があることが示されている。

他方、現実社会では、訂正情報が出た後も、誤情報が強固に残存する事例も少なくない。ファクトチェックの効果が見えにくいのも事実である。瀬川さんによると、ファクトチェックの結果をどのように届けるのかという「到達」や「提示の仕方」を考える視点が今後重要になるという。

公平な報道を心がけることが大切

生成AIの普及により偽画像・動画の量産が深刻な問題になっている。一方で、短時間に大量拡散されるネット上の偽情報への生成AIを使った検証ツールの開発も進んでいると瀬川さんは解説した。参加者からはその時代の社会に応じた「事実」のあり方を探求し、公平な報道を心がけるジャーナリストとしての姿勢も重要ではないかとの意見が寄せられた。

ファクトチェックは、記事ごとに事実を確認する作業だ。このため人間による個別の判断が不可欠で、大量の記事の学習が必要な生成AIとのハイブリッド体制での検証が重要視されるという瀬川さんの指摘に納得した。(J塾23期生 支倉千賀子)



参加者に応答する瀬川氏(撮影 都丸亜希子)

情報収集の手段が多様化し、メディアの存在感がかつてよりも小さくなってきた時代に記者のキャリアを始めました。この時代に読者がメディアに求める科学記事とは何か、購読料に値する情報とは何か、常に悩みつつ仕事をしています。

初めに入った新聞社では、「読者の一部でも『へえ、おもしろい』と思ってくれば、その記事には価値がある」と教えて頂きました。基礎研究の進展など、多くの読者がアンテナを張っていない情報を、紙面に載せることで「おもしろい」と印象づけることを心がけました。

現在はバイオ関連の業界誌に移り、記事に求められる価値も変わりました。読者は業務に役立てる目的で、新聞の何倍もの購読料を払って記事を読んでいます。「おもしろい」だけでなく、記事を通して業

務のアイデアや業務提携の相手が見つかるなど、直接的に利益を生む情報が求められます。公益性のための報道というより、業界振興のための情報交換という意味合いが強いです。一方で、業界外にも影響の大きい記事は公益性を考え、敢えて無料公開することもあります。

取材の姿勢も悩ましいところです。かつては、名の知れたメディアが取材すると言えばおおむね歓迎された…と聞きますが、現在はそうでもありません。誰もが自ら情報を発信できる中、敢えて取材対応に労力を割いてもらうためには、取材「させて頂く」くらいの姿勢を持ちつつ中立性を保つバランス感覚が求められています。日々、現場で悩み続けながら、JASTJの皆さまとも学ばせて頂きたいと思います。

(新理事 菊池結貴子)

JASTJをサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2026年3月現在)

 <p>JAMSTEC 国立研究開発法人 海洋研究開発機構 Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology</p> <p>国立研究開発法人 海洋研究開発機構</p>	 <p>KEK 高エネルギー加速器研究機構</p> <p>大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構</p>
 <p>花王株式会社</p>	 <p>株式会社構造計画研究所</p>
 <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構 Japan Science and Technology Agency</p> <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構</p>	 <p>NINS National Institutes of Natural Sciences 自然科学研究機構</p> <p>大学共同利用機関法人 自然科学研究機構</p>
<p>CACTUS</p> <p>カクタス・コミュニケーションズ株式会社</p>	 <p>CIEM 公益財団法人 実中研 Central Institute for Experimental Medicine and Life Science</p> <p>公益財団法人 実中研</p>
 <p>JAOHFA 健康食品産業協議会</p> <p>一般社団法人 健康食品産業協議会</p>	 <p>大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 Research Organization of Information and Systems</p> <p>大学共同利用機関法人 情報・システム研究機関</p>

理事会から

2025年12月理事会は2日にオンラインで開いた。内城企画委員長から2025年12月から2026年3月の月例会について説明があった。亀松理事から月例会を紹介するショート動画のYoutube掲載について「好結果」との報告があった。

2026年1月理事会は9日にオンラインで開いた。滝事務局長から科学ジャーナリスト賞2026の募集を12月末で締め切り、51作品の推薦があったとの報告があった。一次選考会は2月20日の予定。内城企画委員長から4月、

4月の月例会について説明があった。瀧澤編集・広報委員長から3月発行の会報のページ構成の説明があった。小出国際委員長と高橋副会長から2015年12月に南アフリカで開いた科学ジャーナリスト世界会議の報告があった。JASTJから8名が参加した。

2月理事会は3日にオンラインで開いた。室山会長が5月の総会に向けた準備プロセスについて改めて注意喚起し、新年度の体制や課題について理事全員で意見交換した。

 <p>一般財団法人 新技術振興渡辺記念会</p>	 <p>一般社団法人 日本溶接協会 一般社団法人 日本溶接協会</p>
 <p>株式会社テックベンチャー総研</p>	 <p>農研機構 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構</p>
<p>いのちをつなぐ</p>  <p>東京サラヤ株式会社</p>	<p>ひとりを守る みんなを守る</p>  <p>一般財団法人 阪大微生物病研究会</p>
 <p>東京理科大学 Tokyo University of Science</p> <p>東京理科大学</p>	 <p>国立研究開発法人 物質・材料研究機構 National Institute for Materials Science</p> <p>国立研究開発法人 物質・材料研究機構</p>
 <p>株式会社東芝</p>	 <p>理化学研究所 国立研究開発法人理化学研究所</p>
 <p>株式会社日本医工研究所 Japan Medical Engineering Institute</p> <p>株式会社日本医工研究所</p>	 <p>国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構</p>
 <p>JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE 日本学術振興会</p> <p>日本学術振興会</p>	 <p>ロート製薬株式会社</p>

■ 新入会員の自己紹介

● 大学共同利用機関法人自然科学研究機構 (NINS)

NINSは宇宙・エネルギー・物質・生命等に関わる自然科学分野の中核的研究機関です。保有する最先端設備や先導的共同研究の場を全国の研究者に提供し、研究者コミュニティの総意のもとで機能の充実を図りながら、最先端研究を推進しています。

● 早河 輝幸 (フリーランス)

博士(薬学)取得後、生命科学・医学の専門出版社(羊土社)で14年間、書籍や雑誌の編集に従事し、2026年よりフリーの科学編集者・ライター。専門は生命科学、医学、ヘルスケア。科学と社会の接点づくりや研究者のキャリア支援などにもとりくみます。

退会

堀内 信彦、藤井 義大、荒川 文生(ご逝去)

■ お知らせ

● JASTJのデジタル活動

JASTJは会報のほか、ホームページなどでも情報を発信しています。HP以外の情報発信もすべてHPのホームページからアクセスできます。

Facebook と X (旧Twitter) は公式アカウントを持っています。共に例会の案内を詳しく紹介しています。また、科学ジャーナリスト世界会議からZOOM井戸端会議まで、会員による多彩な活動や参加呼びかけもあります。どちらかにしかない情報もありますので、両方、フォローしていただくのがいいかと思います。ホームページ上段にバナーがあります。

ほぼ毎月、開かれている例会も、参加できなかった人のために講師の了解が得られた場合は、期間限定、会員限定で動画を公開しています。アクセス方法は会員向けのメールで伝えています。ぜひ、JASTJのデジタル情報も活用してください。

● JASTJ会員向けメーリングリスト(ML)は3種類あります。

① 公式ML info-jastj@jastj.jp

件名に[JASTJからのお知らせ]が入る。全会員対象。月例会の案内など。JASTJ事務局のみが発信できる。

② 告知ML kokuchi-jastj@jastj.jp

件名に[kokuchi-jastj]が入る。受信を希望する会員のみがメンバーで、メンバーは誰でも②のアドレスに送ることでイベント告知などができる。告知MLは発信専用です。返信はできないので注意してください。

③ 広場ML hiroba-jastj@jastj.jp

件名に[hiroba-jastj]が入る。受信を希望する会員のみ

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

会員の BOOKS

新刊紹介

「宇宙・生命が嘆く地球沸騰 ～安全で平和な世界は夢なのか」

横山裕道 (著)

(紫峰出版・2400円+税)

発行 2026/01

我々人類は化石燃料の大量使用で未曾有の気候危機(地球沸騰)を招いてしまいました。世界では戦争・紛争が絶えず、核戦争の脅威も存在します。新たな感染症によるパンデミックも心配です。人類滅亡の可能性があり、現状は我々ばかりが身近な宇宙や生命にとっても憂慮すべき事態なのではないでしょうか。

こんな発想から本書は生まれました。できるだけ多くの科学者を登場させ、エピソードや科学者の人間模様を織り交ぜて興味深い物語にすることを心掛けました。全体として宇宙、生命の魅力・不思議さを引き出すとともに気候危機の深刻さを浮き彫りにしており、他に類がない内容になったと思います。

(横山裕道)



「コロナ禍、誰が何を伝えたか」

野口範子、榎太一ら (編著)

(東京化学同人・2400円+税)

発行 2026/03

世界をパニックに陥れたコロナ禍。人々を振り回し、時に分断も生んだ科学情報の発信に着目し、川ならば「源流～河口」に至る各流域を最前線で担った人々へのインタビュー集である。登場するのは民放テレビ記者、テレビやSNSで発信した臨床医、ファクトチェックの仕掛け人、新聞記者、専門家会議の世話人、ウイルス学や感染症学の専門家。同じ厄災も、立場によってここまで違って見えるのだ。西浦博さんが代表を務めるJSTの委託研究に参画した、同志社大学サイエンスコミュニケーター養成副専攻の教員4人による編著。次のパンデミックで同じ混乱を繰り返さないために、ぜひ一読を。

(元村有希子)



「脳がないのにクラゲも眠る 生物に宿された「睡眠」の謎に迫る」

糸和彦 (著)

(朝日新聞出版・1800円+税)

発行 2026/02

「売れる本を作ってください」。雑誌キャリアを歩んできた私が書籍編集部へ異動し、会社からそう言われ、自然科学分野で挑戦してみようと企画・編集したのが本書です。

睡眠はこれまで脳の休息と考えられてきましたが、近年、脳がないクラゲも眠ることが発見されており、睡眠は脳より先に進化したと考えられるようになってきたそうです。

そんな最新知見をまとめて、睡眠の謎に迫る一冊を書いてほしいと、名古屋市立大学の糸和彦先生に執筆を依頼して発刊にたどり着きました。多くの人に手に取ってもらえるように、書籍タイトルは「脳がないのにクラゲも眠る」としましたが、クラゲの本ではありません。睡眠の本です。ぜひ一読ください。

(杉村健)



がメンバーで、メンバーは③のアドレスに送ったり、返信したりすることで自由にやりとりができる。

※ ※ ※

ML利用のルールなどは、<https://jastj.jp/about/service/>に書いてありますので一読ください。疑問点などありましたら、事務局 (hello@jastj.jp) まで連絡してください。

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル8階848
Email: hello@jastj.jp

会長 室山哲也 / 事務局長 滝順一
編集長 瀧澤美奈子 / 副編集長 井内千穂 / 撮影チーフ 都丸亜希子